

ハントケ：文学の現在性Ⅲ

文学的ルポルタージュの可能性

南 谷 和 伸

1

第二次世界大戦中、ナチス・ドイツに対する抵抗運動を経て、バルカンの多民族がユーゴスラビア連邦を形成し、東西の対立から一定の距離を保った自主独立体制を維持できたことは、民族紛争の克服と多民族の共存に向けた理想の実現とさえ見えた。しかし1991年6月、クロアチアとスロヴェニアがユーゴスラビア連邦からの分離独立を宣言するや、それを契機に勃発したバルカン紛争は、民族と宗教それに政治的利害が絡み合った野蛮が支配する黙示録的なカオスへと突き進んでいった。「集団虐殺」、「民族浄化」、「強制収容所」、「集団レイプ」など凄惨な言葉がニュースの中で繰り返され、住居を捨てて着の身着のまま逃れていく大量の難民たちの映像がメディアを通じて送られてきた。

多民族の共存がようやく実現されたかに見えていたユーゴスラビアでのこの惨状は、「何ゆえに人類は、真に人間的な状態に踏み入っていく代わりに、一種の新しい野蛮状態へ落ち込んでいくのか」という問いを改めて思い起こさせる。これは、ナチスに追われてアメリカに亡命を余儀なくされたマックス・ホルクハイマーとテオドアー・アドルノに『啓蒙の弁証法』（1939～1944）を執筆する契機を与えた問いである。西欧の文明を飛躍的に発達させた「近代の科学技術は、その実、人間性の破壊という代償によって購われてきた」、¹というのが彼らの到達した認識であった。1938年11月9日の「水晶の夜」を発端として公然とくりひろげられていくユダヤ人排斥はアウシュヴィッツ強制収容所とガス室において野蛮の頂点を極めた。

「アウシュヴィッツ」の再現は決して許されてはならない、これが戦後国際世論の共通認識であった。ところがユーゴ紛争では、少なくとも戦後のヨーロッパでは克服されたはずの民族集団大虐殺という野蛮が再現され、世界に大きな衝撃を与えた。それはヨーロッパ近代の発展の理論的根拠である「啓蒙」の思想が、もともと野蛮の克服を目指すものでありながら、結果的に常に

新たな野蛮へと崩落していくのではないか、という深刻な懷疑と未来にたいする理性的な信頼の瓦解をひき起こしたからであろう。血で血を洗う凄惨な紛争のなかで崩壊してゆく旧ユーゴスラビアの紛争は、野蛮の克服という進歩の概念を無残にも粉碎し、啓蒙の思想そのものの自己崩壊をあらためてまのあたりにして見せたといえよう。

ハントケは『私は象牙の塔の住人』(1972)と称し、理念やイデオロギーの世界にはむしろ背を向けて、自分の知覚に直接触れる事物との経験を語る言語表現に彼の詩学の拠りどころを求めて活動が続けてきた。このような事物そのものへと向かう関心の転向は、第一次世界大戦中、世の喧騒を逃れ、自然の事物そのものと向き合ったセザンヌの絵画に負うところが少なくない。(『サント・ヴィクトワールの教え』1980年)

1942年、オーストリア・ケルンテン州のグリフェンで生まれたハントケは、スロヴェニア人である母方の家族の中で少年期を過ごしたが、彼の生家の南に連なるカラヴァンケン山脈を越えると、スロヴェニアであった。自然の中で事物と向き合い、その美的体験に存在の現実をみるハントケにとって、スロヴェニアはどこよりも寛いだ安らぎを与えてくれる彼の内面の故郷であった。それは余所者である彼が訪れても故郷のイメージが現実化される、彼にとっては重要な詩的空間であり、彼の詩的想像力の故郷であったといえる。しかしハントケの知覚の主体である「私」は、いわゆる外界の現実、たとえば日常の実生活に関わらざるを得ない現実、社会的、政治的現実といったものに全く無関心であったわけでもない。1991年6月25日、スロヴェニアがユーゴスラビア連邦を離脱するや、はやくもその一ヶ月後に、彼は『第九の国からの夢想家の別れ』を書いて、スロヴェニアに別れを告げている。1918年、オーストリア帝国の植民地支配を脱したユーゴスラビア、さまざまな党派や矛盾する世界観にもかかわらず諸民族が共同してドイツに対して戦ったユーゴスラビア、この「ユーゴスラビアの中にあり、かつまた共にあるスロヴェニア」、それこそが彼のメルヒェンの現実であり、彼の詩的想像力の故郷だったからである。² ハントケにはパルチザン闘争を戦い抜いたすえに果たしえた多民族国家ユーゴスラビアへの共感が存在していること、またその歴史的な現実が彼の詩的想像力に何らかの影響を与えていることは否定しがたい。1995年の11月末、メディアのレンズを通さずに、自分の知覚でとらえた現実を体験するためにセルビアを旅したハントケは、「セルビアのために公平を」求めて、手記『セルビアへの冬の旅』を1996年初頭に発表した。ユーゴ紛争の経過を注視していた彼は、メディアを通じて送られてくるニュースのどれもが一方の視点に立った報道であることに強い疑問の念を抱いたからであった。しかしニュースを通じて、セルビア側による集団虐殺や強制収容所、また難民たちについて連日のように知らされている世間の目はハントケに冷たく、モラルという観点から言

えば、彼の手記は「倫理的ニヒリズムにたいする極めて破廉恥な寄与のひとつ」,³と厳しい批判に曝される結果となった。

たとえば、ハントケと同世代の作家ペーター・シュナイダーはほぼ次のように論評している。ハントケはセルビア人について語っているが、その排外主義的な指導者たちの犯罪については語らず、事実上の犠牲者たちをなおざりにしている。いずれの側においても民族浄化などという人種の純粹妄想の犠牲者たちは民間人であり、人道的な立場から停戦に向けて介入すべきである。ハントケの怒りは殺人者ではなく、犯罪とその犠牲者について報じるジャーナリストに向けられている。⁴

ハントケのメディア批判に対する反批判は総じて、ハントケが紛争の現場を目撃していないこと、したがって彼の手記は批判している事実関係について根拠ある資料に基づく具体的な立証に欠けていること、セルビア側を擁護せんとするかのような彼の発言は非人道的である、という点に集約される。96年夏、ハントケは再度セルビアを訪れ『冬の旅への夏の補遺』を発表したが、マスメディアに対する彼の論調は変わらず、世間ももはや大きな反応を示さなかった。⁵

ハントケはメディアが報道している事件そのものを誤りであるとか、否定しているわけでももちろんなく、報道の姿勢とメディアの実証主義的リアリズムについて疑問を投げかけているのである。マスメディアが高度に発達している現在、世論形成に与えるその影響力は極めて強大である。それだけに報道の中立が守られねばならず、それが報道のモラルである。しかしユーゴ紛争についての報道では、このモラルが守られていず、それどころかメディアによってすでにセルビア人が犯罪者であるにひとしい判決がすでに下されていると彼はみなしている。

一方、今何について報道すべきであるのか、最も重要な政治的・社会的問題を当然選択しているのはやく伝えることを使命としているジャーナリストは、目前で行われている野蛮な虐殺を報道せずに、来客に対するセルビア人の接待好きについて語るハントケの態度はモラルに反することであると考えらるであろう。

いずれにしても、メディアによる報道は、その公共性のゆえに中立性が守られる必要があるといえるが、そこにたとえばセルビア治安部隊の犯罪行為が、セルビア人すべての行為として普遍化されて受け止められる余地を残しているであろうし、同様の問題はセルビア人の「寛容」について語るハントケの手記にも言えることである。

2

ところでバルカンの民族紛争は、ボスニアでの紛争が一応沈静化したかに見えると、紛争の場を南隣のコソボに移した。97 年末頃からアルバニア系武装勢力であるコソボ解放軍の活動が活発になり、それを鎮圧しようとするセルビア治安部隊との間で戦闘が繰り返され、多数のアルバニア系住民が難民となってアルバニアに、あるいはマケドニアに非難して行く窮状が報道された。パリ郊外のランブイエでアルバニア系住民代表と新ユーゴ連邦代表とが西側の仲介によって調停交渉を重ねたが進展は見られず、一方、マケドニアの国境付近に逃れてくる避難民の数はいよいよ膨らんでいた。難民たちの列のなかを乳飲み子を抱いて放心の態でぬかるみの中を逃れて行く若い母親の姿が各誌に報道され、人々の心を打った。調停交渉が難航するなか、NATO は国連決議を経ずして、人道的理由に基づき、1999 年 3 月 24 日、ユーゴ空爆に踏み切った。

空爆が開始されるや、ハントケは 3 月 30 日から 4 月 2 日まで『ユーゴスラビアへの受難週の旅』(第一部)を、さらに 4 月 23 日から 29 日まで『戦争下のユーゴスラビアを行く二度目の旅』(第二部)をし、その手記『涙ながらの問いかけ』が、翌年春ズーアカンプ社から出版された。空爆下にあるユーゴスラビアを旅するハントケのルポルタージュはこれまでの批判と反批判に新たな問題を、あるいは視点を投げかけてくれるであろうか。

表題となっている「涙ながらの問いかけ」は、ハントケが出会った女医が爆撃のために水道の水もなく、苦しんでいる患者たちに満足な治療さえできない苦悩の底から発した問いである。「こんな苦しみを受けるからには、—それなら罪があるに違いありません。私たちが罪を犯したとしか考えられません。でもどんな罪が? なぜ?」⁶ この問いはまた謂れもなく虐殺された犠牲者たちの、逃れるしかない難民たちの問いでもあるはずである。この重い問いに誰が答えられるであろうか。

99 年 3 月 24 日、NATO 多国籍軍によるユーゴ空爆が開始されたが、おりしも復活祭 1 週間前の受難週間である。言うまでもなく、彼の手記の第一部に付けられた副題「ユーゴスラヴィアへの受難週間の旅」は、空爆にさらされたユーゴの受難に掛け合わされている。国際世論の中で侵略者と決め付けられ制裁を受けているユーゴとマスメディアを批判し侵略者セルビアの擁護者とするし付けられ孤立している作家、両者が置かれている状況は著しく類似している。空爆開始直後のユーゴへの彼の旅は、このような共通の状況下での共感が誘因となっているともいえる。しかしなんといっても彼の旅は与えられた現実ではなく、攻撃を受ける状況下に自分の身を置き、

直接体験している現在を言語化することによって自己の存在をあらためて見出すためである。彼の文学は状況内での体験という磁場に出現してくる自己の発見にかかっているからであり、それが彼に書くことの確証を与えてくれるからである。ユーゴスラビア紛争をめぐるマスメディアに対する彼の感情的過ぎるともみえる批判には、客観的なリアリズムは可能であるのかという文学的なテーマがその根底にあるといえる。

ハントケのルポルタージュ『涙ながらの問いかけ』は、やはりマスメディア批判から始まり、それが重要な主題のひとつになっているといえる。

パリに住むユーゴスラビア人の知人の娘が通っている学校で、NATOのユーゴに対する空爆が始まると、彼女のクラスの生徒たち全員が、彼女に連帯してフランス大統領に抗議の手紙を書いたが、テレビでアルバニア人難民の惨状ばかり伝えられるようになると、クラスの子供たちは戦争に抗議したことを恥じるようになっていった、というのである。⁷ このような変化は影響を受けやすい子供たちの世界でのみ起こったことではないであろう。子供たちの家庭で起こっているものであり、犯罪的行為がセルビア人全体に普遍化されるべきではないけれども、世間の実情は理性的な判断より感情的な受けとめかたにしたがって意識形成がおこなわれていくといえるであろう。マスメディアの報じるニュースはあるひとつの視点からとらえられた「事実」であっても、普遍化されて受けとられていくだけの影響力をもっていることを示す挿話である。

ハンガリーと境を接するユーゴスラビアの国境検問所で、待合室のテレビに爆撃を受けた街のニュースが流され、続いて兵士たち、フォークダンスに興じる人々、郷土の風土が映し出されたあと、ユーゴスラビアの愛国歌が流される。そのとき「プロパガンダ」という言葉が彼の脳裏に浮かぶ。しかしそれは「作り物、意図的なものではなく、自然発生的なものである。圧倒的に優勢な力に脅かされているとき、最も無邪気な像を見せる、虚と真実とを超えた、純粋に自然に生まれてきた、そんなプロパガンダだ」⁸、と彼は思い巡らせ、メディアのパースペクティブに共感しながら受け止めている。

それに反して西側のマスメディアに対してはほとんどそれは罵倒に近いといえるほど極めて手厳しい批判を浴びせている。

「西側の戦争大国に・・・買収されて彼らと結託しているメディアのプロパガンダは情報の集中砲火・・・言葉と映像の並行射撃だ」・・・『大量虐殺』『強制収容所』『集団虐殺』『民族浄化』『集団暴行』『暴力兵』『虐殺者』『セルビア寄り』、これらの言葉に加えて、『有刺鉄線にかけた手』『睫毛の涙』『目がかすんで、いままさに死につつある老女』などの映像のクローズアップ。現在マケドニアやアルバニアやモンテネグロの国境から送られてくる映像と、かつてボスニ

アから送られてきた映像とは互いに似ているのでは、否、それらの映像の焦点のあてかた、視覚構図が互いに同じなのだ。・・・これらの映像と言葉から成るのは、いったいどんな真実なのか」⁹

緊迫した非常事態のユーゴスラビアで、「虚と真実を超えた・・・純粹に自然に生まれてきた」プロパガンダは、事実や真実が省かれていても、視聴者側の自由な想像力で補って考えられるから、全国的に放映されてよいのだ、という主張にはいささか理解しがたく、作為など働く余地のない緊迫した状況を共有していれば、対象と受信者との間に交歓的な生氣ある現実が生まれるからだ、とでも理解すべきだろうか。プロパガンダはとくに政治的宣伝の意味で使われる用語であり、陣営のいかにかわらずプロパガンダを行う場合そこに明確な意図が働いているはずである。

一方、西側メディアに対する批判は、意図的な決まり文句の反復や同じ視点から対象を写し撮った映像にリアリティーがないとする見解は、ハントケの写実的リアリズム批判に基づくものであるといえる。

メディアの流す情報が創りあげられた虚偽のものであるとは断言できないまでも、そこにはある種の方針なり、意図が働いていることに間違いはない。この点は緊迫した情勢の下にあるユーゴスラビアの放送においても同様であるといえよう。戦争では手段を選ばず、あらゆる手段が動員される。情報はなかでも最も強力な武器の一つであるといえる。

たとえば、このバルカン紛争でメディアが最も多用した言葉、「民族浄化」はアメリカの民間情報戦略機関が創り出した言葉である。広告代理店を営むこの機関がクロアチア、ボスニア政府(モスLEM系)、それにコソボのアルバニア系組織の情報戦略を請け負っていたのである。ボスニア政府の要人が密かに渡米し、戦略が練られたが、その様子はNHKのスペシャル番組で放映された。それによると「ホロコースト」を使おうと考えたが、この言葉にはすでに過去の歴史的な意味が付着していて、新鮮なインパクトに欠ける。それで「民族浄化」にしようという結論に至った、というのである。¹⁰ これは、既製の意味がこびり付いた言葉を用いた対象描写には生きた現実がなく、重要なのは言語の現実である、と47年グループの席上で批判し、¹¹一躍脚光を浴びたハントケの言語観にひとしい理論が情報戦略に実用されている事例であるといえよう。

3

ハントケのマスメディアに対する批判は主として報道姿勢に向けられているが、メディアが社

会を演出しているともいえる現在、メディアの表現活動が作家としてのハントケの言語活動をも含めて、技術の進歩と共に、より大量の人々に、多様で迅速な情報の提供を目指して急速な発展をとげていく。しかし一方で技術の発達には、現場で体験しているレポーターと受信者との距離をますます拡大しているといえる。主体的な体験そのものの中で営まれているハントケの言語行為は、世界の現実に背を向けた、頑なな作家の個人的な内面にのみ関わっているように見えながら、その実、現代の情報化社会の危険な問題性と向き合っているといえる。

現在、高度に発達した情報化社会において、メディアを通じて国際社会が成立しているといつて過言ではないほどに、世界は情報ネットによって緊密に構成されている。しかしそれだけに情報の姿勢によっては、紛争の方向に決定的な結果をもたらす可能性をはらんでいる。情報戦略機関が虐殺者セルビアのイメージ形成に重要な役割を果たしていたことはすでにみたが、ハントケが「セルビアのために公平を」求めた現実の社会的、政治的レベルでの批判はこの点にあったと言える。しかしこの批判は、こと個別の「ユーゴスラビア紛争」にのみ関わる問題であるのか。ハントケは報道の中立性を、すなわち、報道のモラルを問い直していると同時にこの問題はより深く情報化社会における知のあり方そのものに内包されている問題をあらためて提起している。

評論家として、またジャーナリストとしても活躍したギュンター・アンダースはおおよ次のように述べて、マスメディア時代の世界経験、知識の問題点を指摘している。

「人間は世界を経験し、知ることによってようやく世界に到達し存在することができた」。¹² しかし経験知によって成り立っていた人間と世界との関わりに革命的な変化をもたらしたのがラジオ、テレビである。「人間が世界に出向くまでもなく、世界が人間に提供され」、¹³ しかも人間の意志いかんにかかわらず世界が押し寄せてくるのである。「人間と世界との関係は一方的なもの」¹⁴ になり、情報の洪水と化して迫ってくる世界の前で人間は従属的な立場に立たざるをえなくなる。「見も知らぬものに関わろうとしないのに、見知らぬ人や事物、事件や状況がごく親しい状態にあるかのごとく提供される」。¹⁵ 繰り返し大量に与えられる情報は、圧倒された人間の意識にすりこまれ、周知の事態として確固たる事実性をつくりあげていく現象を彼は「親和作用」とよんでいる。しかも皮肉なことに、このような「親和作用の根源は疎外そのもの」¹⁶ に他ならない。この疎外の現象をアンダースは「幻影化」となづけ、つぎのように説明を加えている。すなわち「放送される事件は、現在であると同時に非在であり、現実的であると同時に仮象でもあり、存在すると同時に存在しないもの、つまり幻影である。世界は現在も非在もしない幻影となるのだ」と。¹⁷

マルクスが、物が商品価値に抽象化されていく資本主義に人間疎外の根源を見出したようにア

ンダースはメディア技術の発達によって、世界が情報商品として提供されていく「幻影化」に人間疎外の根源を見出しているのである。携帯電話やパソコン・インターネットなど最近の情報機器の普及によって世界の幻影化は以前にもましてはるかに速いテンポで押し進められ、その時流にのれない「時代おくれの人間」は、生活を諦めねばならないまでに疎外が進行していて、技術の発展は、この点においても非人間化を代償としているといえる。

われわれには、しかしながら少なくとも自らの自由に基づいて多量の情報から必要なものを選択し、メディア機器を、あるいはメディアそのものを拒否する自由が残されているのではないだろうか。アンダースによれば、「われわれの自由な選択についても前もって決定されていて」、どのテレビ局の番組であれ、新聞や雑誌であれ、われわれはメディアの視聴者や読者としてしか選ぶことができない以上、われわれの自由な選択は前もって決定されていることになる。結局、「われわれが世界を経験するのではなく、幻影である世界がわれわれに提示されるように決定されているのである」。¹⁸ 現代世界の中で生活しているわれわれ人間にとって問題となるのは「『世界』や世界そのものの経験ではなくて、世界の幻影と幻影の消費」¹⁹である。人間にとって「現実の共同世界」が重要であることに変わりないけれども、出来事の世界も幻影化された形で届けられてくるのであるから、「前もって決定された出来事」しか起こらないのであって、われわれの人間世界は「前もっての決定」という巨大な社会システムと化しているのであるから「人間的自由」というのものはや幻影でしかないという結論にいたる。²⁰

ハントケのメディア批判もまさにこの「前もって決定」という点にあった。²¹ 旧ユーゴスラビア紛争を伝える映像はほとんど同一のパークスペクティヴからつくられた、すなわち「前もって決定された」反セルビア的な視点であったから構成されたものであるとしか彼には考えられなかったからである。だからこそ彼はメディアのレンズを通していない自分の目で見、前もって決定されていない世界を自ら経験するためにセルビアへ出かけて行ったのであった。しかしメディアの中立性もまた与えられた視点の多様性のひとつであり、それもまた「幻影化」を免れるものではない。それは前もって決定されたひとつの視点であり、受信者側に選択の自由がないことに変わりはない。ハントケの批判は、メディアのモラル、つまり報道視点の「公平を」求めているようにみえながら、マスメディアが、社会システムとなっている情報化時代におけるわれわれの世界経験のあり方そのものに向けられていたといえる。

4

情報化時代といわれる現在、好むと好まざるとに関わらず、われわれの知の経験が生の実現においてではなく、メディアを経た経験知へと変質していくが、それはとりもなおさず自然な現実体験からの人間疎外の過程であり、現在の情報技術の発達とは自然な経験知からの人間の乖離をますます加速度的に進行させている。今や情報は瞬時に世界を駆け巡り、それに対応するための新たな世界がつくりあげられてゆき、世界の「幻影化」とどまるところを知らない。技術の発達は確かに人間の知識を飛躍的に拡大させたが、その一方で技術による人間の疎外も同じく加速度的に深化しているといえる。知の拡大と疎外された現実とはメディア技術が持っている二つの顔である。

ヴァルター・ベンヤミンは『複製技術の時代における芸術作品』のなかで、複製技術が芸術作品全体にどれほどの深刻な変化を与えたかについて論じている。それはメディア技術の発達が「世界経験」の「幻影化」を進めていく歴史的な過程を理解する上で重要な示唆を与えてくれるであろう。情報技術社会では芸術作品といえども世界の幻影化を免れることはできないからである。

芸術作品について、「ほんもの」か、それとも複製（コピー）かとの判定は複製技術の進歩と比例してますます困難になっていく。この困難の度合いが技術の進歩の尺度ともいえようが、オリジナルな作品のもつ『いま』『ここに』しかないという「芸術作品に固有の一回性」こそ「ほんもの」という概念をつくりあげているのである。

たとえば、特別展のために外国の美術館に展示されたミロのヴィーナスは、「いま」「ここに」あるという「一回性」のゆえに、ルーヴルには「いま」存在していないことを、そしてルーヴルからの移動にまつわる経緯を作品の所有関係の変遷の歴史として刻んでいくといえる。また作品素材の「物質的構造の変化」についても同様であって、時間の経過が必然的にもたらす大理石の変色や失われた腕の断面に現れた風化の痕跡などを含めて「作品の歴史は、まさしくこの存在の場と結びついた一回性においてのみかたちづくられてきたのである」。²²

複製技術は芸術作品に備わるこの特性を、すなわち『いま』『ここに』しかないという「固有の一回性」を無効にしようとするが、「複製にはどれほど精巧につくられていても、『いま』『ここに』しかないという芸術作品固有の一回性は完全に失われてしまっている」。²³これが複製品の特質であるといえよう。

作品「固有の一回性」に裏打ちされた『『ほんもの』であることには、実質的な古さをはじめとして歴史的な証言力にいたるまで、作品の起源から人々に伝承しうる一切の意味がふくまれている。ところが歴史的な証言力は実質的な古さに基づいており、複製はこの実質的な古さを無意味なものにしてしまい、歴史的証言力を脅かし、ひいては作品のもつ権威（威厳崇高性）をもゆるがせる」。ベンヤミンは、「ほんもの」の作品から放たれる特有の権威を「アウラ」という概念でとらえ、複製技術のすすんだ時代のなかで滅びてゆくものは作品のもつアウラである、と述べている。²⁴

さらにこの「アウラ」が失われていくプロセスこそ現代の特徴であり、このプロセスの重要性は、単なる芸術の分野をはるかにこえている。すなわち、一般的にみれば複製技術は、第一に複製の対象をオリジナルな領域から引き離してしまう、つまりオリジナルな特質が疎外されることによって複製品は出現するといえる。第二に複製技術は、一回かぎりの作品にかわって、同一の作品を大量に出現させ、こうしてつくられた複製品をそれぞれ特殊な状況のもとにある受容者のほうに近づけることによって一種のアクチュアリティを生み出している。この二つのプロセス、オリジナルからの乖離と同一複製品の大量生産、これは従来の芸術の性格に激しい衝撃を与えた。「これは現代の危機および人間の革新と表裏一体をなすものである」、²⁵とベンヤミンは指摘している。そして「こんにちの激しい大衆運動もこれと無縁ではない」と。大衆運動の拡大にもっとも大きな社会的役割を果たしたのが、当時の複製技術の典型といえる映画である。その「破壊的なカタルシス作用」はやり場のない鬱積した大衆のエネルギーに一定の方向性を与えるに絶大な力を発揮したのである。ベンヤミンが『複製技術の時代における芸術作品』を書いたのは 1936 年であることから、ここでいわれている大衆運動はナチズム台頭を指していることはいうまでもない。

「歴史的時間」の流れのなかでは、人間社会のあり方が変化するにつれて、その知覚様式も当然変化していくであろうが、人間の知覚が形成される方式—知覚のメディア—は、単に自然の制約だけではなく、歴史の制約をも受ける」²⁶、とベンヤミンは指摘している。自然に備わっている人間の感覚が技術の発達によって飛躍的に拡大されるが、それと同時に人間にもともとそなわっている知覚能力自体も変化していくというこの指摘は、時代のモードにたいする人々の順応性や美的感覚の変遷などを考えれば、じゅうぶん理解の届くところである。しかし、ここでメディアの発達と関連して再考を要するのは、複製技術がもたらした、オリジナルなものからの乖離と複製品の大量生産という特質が知覚にどのような影響を及ぼすのかについてである。

複製技術にはオリジナルなものに可能な限り近づこうとする意志が潜んでいるが、当然この特

質は一回かぎりのオリジナルなものにそなわっている近づき難い気品とでもいうべき現象である「アウラ」の消滅という結果をもたらす。アウラの消滅と社会生活における大衆の役割が増大したこととの関連を明らかにしようとするベンヤミンはそれを複製技術が事物一般の所有関係にもたらした変化から説明している。つまりプロレタリア大衆の事物に対する所有欲をいかにして満たすかが最大の社会的現実の問題であったが、それに一定の妥協点を見出させたのが複製品であって、大衆が既存の物の複製を受け入れることで事物の「一回性」と大量の需要との間に一定の均衡をつくりだしたのが複製技術であったと分析している。

つまり 1920 年代、いよいよ広汎に進んでいくプロレタリア化された大衆層の形成は、「所有関係の変更」を要求する大衆の声を拡大していくが、ファシズムは「所有関係をそのままにして、プロレタリア大衆を組織しようとする」²⁷。それを可能にしたのが、とりわけ音と映像を大量に複製し広範囲に提供することのできる複製技術の発達であるといえよう。ナチスのプロパガンダはラジオと映画の普及をおいて考えることはできない。ハントケの母マリアもオーストリアに侵攻したヒトラーのラジオ放送を聞いて将来への希望もない鬱々とした日々、突然世界秩序がもたらされたような体験をした一人であった。もっともこれえが幻影に過ぎなかったことはたちまちのうちに判明したのであったけれども。²⁸

ベンヤミンは、所有関係の変革を要求するプロレタリア大衆に実質的なものを与えることなく組織するファシズムの戦略をおよそ次のように分析している。

ファシズムは、「所有関係の変革」を要求する大衆に対して、従来の所有関係は温存したまま発言させようとする。行き着く先は、「政治の耽美主義」である。つまり「マスコミ機構を征服して」、指導者に対する「礼拝的価値」（指導者崇拜）を大衆のなかにつくりだすことである。こうした「政治の耽美主義のためのあらゆる努力は、必然的にひとつの頂点をめざしている。この頂点とは戦争にはかならない。戦争、ただ戦争のみが、現在の所有関係に触れることなく、大規模な大衆運動に目標をあたえうるのである。これがファシズムの現実である」²⁹。

ファシズムの幻影による大衆の支配を可能にしたのが「現代の技術機構」にはかならない。旧ユーゴスラビア連邦の悲慘と崩壊を招いた背後に「民族主義」をおおる指導層とメディアとの結合を無視することはできない。

知の拡大による近代化をおしすすめる啓蒙の精神が、ヨーロッパ植民地主義をもたらす原動力でもあったし、さらには知の拡大をめざす技術が、実態を離れたイメージのなかで生きること、人間生活の重点が移されるまでに発達したが、このような過程のなかで啓蒙の自己崩壊を、「新たな野蛮へ落ち込んでゆく」のを見ることができよう。

5

現代社会においてメディア機構の役割は、それなくして現代生活を営むことができないまでにわれわれの生活に深く関わっており、国際社会もますます緊密なネットワークによって組織化が進んでいることはいうまでもない。それだけ人間生活がリアルな現実から乖離し、幻影化が進行していることを意味している。ユーゴ紛争においてもセルビア、クロアチア、モスLEMそれぞれの民族集団がメディアを駆使し、情報合戦を戦うなかで民衆は幻影に脅え、憎しみを増幅させていった。それが更なる悲惨を拡大させていった側面のあることは否定できないであろう。

ユーゴスラビアを巡るハントケのルポルタージュは、虐殺が繰り返されている現実を前にして、素朴で善良な客好きのセルビア人について語ることはモラルを疑いたくなることかもしれない。しかし戦争の傍らで、じっと耐えながら人間性を失うことなく生きている人たちがいることも、しかも大多数の人たちがそうであることも、確かな現実である。ハントケのルポルタージュは、戦争という状況下で人間性を否定され、人間性を喪失した悲惨な現実のほかに、メディアのネットを通してない、あるいはネットからこぼれ落ちている「現実」を自分の目で確かめ、拾い上げることに方向づけられている。彼は先ず、戦争の既成概念にとらわれず、「生活世界」に自分の身を置いてみることから「現実」と出会おうとしたからである。³⁰

フッサールは主体が客体である自然界を意味づけ概念化することによって世界を構成しようとする近代の科学的客観主義が人間を自然から疎外し危機的状況におちいりつゝあるという認識にたって、客観的世界認識という態度決定を中止し、「生活世界」に立ち返ることを主張したのであった。近代の科学技術は人間性の破壊によって購われてきたとみなすホルクハイマーとアドルノー、メディアによって与えられた幻影を前にして人間は主体的自由を奪われていると主張するアンダース、複製技術がファシズムの幻影による大衆支配を可能にしたと論ずるベンヤミン、彼らはいずれも、科学技術の進歩が同時に生の現実から人間を疎外してきたと認識している点で、フッサールの「危機意識」に連なっている。既存の客観的な外界を描きとる写実的リアリズムを批判し、すでに概念化され、体制化されてしまっている世界にはリアリティーが存在しないと考える立場からメディア言語を批判するハントケもまた、彼らの思想の系譜に連なっているといえる。

ハントケのルポルタージュは事実の正確な実証やデーターなどに基づく客観性に欠けるという点で多くの批判を受けた。ルポルタージュという散文形式は技術時代に適した「手際よく把握さ

れた客観的な知」に対する社会の要請に応じて盛んになったジャンルであるといわれる。レポーターは「現実の一コマを写し撮る人間のカメラ」といわれたように、ルポルタージュには現実の即物的でかつ実用的な情報提供が求められている。³¹

このような要求に従えば、ハントケのルポルタージュは当然批判をこうむることになる。たとえば、大虐殺が行われたとされているスレブレニツァについて、サラエボのセルビア人地区から移動してきた人々、「とくに男たちに、家族や子供達や愛する人たちの面倒をみられないという、はっきりと見てとれる重い心」、につづけて、「彼らはサラエボから退去する際にスレブレニツァまで運んできた屍体を虐殺地とされているこの場所に埋めたというのだ」、というジャーナリストの誹謗に対して、「何も発言しないでおく。黙秘する。(注意せねば!・・・行方不明のサラエボ・セルビア人にふれることは、『大量虐殺』や『集団虐殺』を否定することになるのだ!)」³²、と反証を回避している。

彼のルポルタージュは外界を意味づけ、概念化しようとする主体ではなく、ひとまず主体としての私をエポケーした「わたし」、外界との出会いの「わたし」という視点から書かれている。彼が記述しているのは、お客に精一杯のもてなしをして歓待するセルビア人気質であり、峠道の狭い小屋で席を譲り合いながら語る人たちの温もりであり、それに連帯感を覚える「わたし」である。彼のルポルタージュからはいわゆる客観的な知識を期待することはできない。それは彼がメディアを通じて提供される客観的な知識に懐疑を抱き、まだ見い出されていない現実を体験したいからこそ旅に出たのであったからである。

あまりにも知れ渡った「虐殺」について、「事実」を根本的に覆すような発言にさえ、その証拠となる根拠を明らかにせず、ルポルタージュとして「現実の即物的で実用的な」情報の提供という社会の要請にこたえるものではない。したがって、当然のごとく、彼の立場は情報化社会から孤立せざるを得ないが、しかしハントケもまた作家として言語活動を通じて社会に関わらざるを得ない。この矛盾を抱えながら情報技術の発達が必然的に内にはらんでいる人間性の喪失を、「幻影化」を、言い換えれば虚実不明のヴァーチャル・リアリティーのなかで失われてゆく人間的現実を言語化することによって「野蛮への墮落」を批判し続けながら、人間的なものの回復を図らざるを得ない。彼の文学的ルポルタージュはその可能性を求めて、敢えて孤独の道を行く試みであるといえよう。

註

- 1 Max Horkheimer und Theodor W.Adorno:Dialektik der Aufklärung In:Theodor W.Adorno:Gesammelte Schriften Bd.3 Suhrkamp Frankfurt am Main 1981 S.13
- 2 Vgl. Peter Handke:Abschied des Traumers vom Neunten Land. In:Langsam im Schatten. Suhrkamp Verlag. Frankfurt am Main. 1995. st. 2475 S.186. 188.
- 3 Vgl. Dzevad Karahaman:Bürger Handke, Selbenvolk. In:Die Angst des Dichters vor der Wirklichkeit. (Hg.) Tilman Zülch. Steidl Verlag. Göttingen 1996. S.44
- 4 Vgl. Peter Schneider:Der Ritt über den Balkan. In:Die Angst des Dichters vor der Wirklichkeit. (Hg.) Tilman Zülch. Steidl Verlag. Göttingen 1996. S.25ff.
- 5 Vgl. Peter Handke:Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien. Suhrkamp Verlag. Frankfurt am Main 1996
Peter Handke:Sommerlicher Nachtrag zu einer winterlichen Reise.
Suhrkamp Verlag. Frankfurt am Main 1996
参照 拙論 ハントケ:文学の現在性 I セルビアへの冬の旅
近畿大学教養部研究紀要 第30巻 第3号 1999年3月発行
拙論 ハントケ:文学の現在性 II ユーゴスラヴィア幻想
- 6 Peter Handke:Unter Tränen fragend. Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 2000 S.154.
ペーター・ハントケ/元吉瑞枝訳『空爆下のユーゴスラビアで—涙の下から問いかける—』同学社 171頁
- 7 Vgl. ibid. S.9
- 8 Vgl. Peter Handke:Unter Tränen fragend. Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 2000 S.19f.
ペーター・ハントケ/元吉瑞枝訳 空爆下のユーゴスラビアで—涙の下から問いかける— 同学社 17頁以下
- 9 ibid. S.21f. 同書 18頁以下
- 10 参照 最上敏樹著 『人道的介入』 岩波新書 87頁
- 11 Vgl. Peter Handke:Zur Tagung der Gruppe 47 in USA. In:Ich bin Einbewohner des Elfenbeinturms. St 56 S.30f. S.34
- 12 ギュンター・アンダース著/青木隆嘉訳 『時代おくれの人間』上 法政大学出版局 120頁
- 13 同書 117頁
- 14 同書 136頁
- 15 同書 123頁
- 16 同書 131頁
- 17 同書 138頁
- 18 同書 1頁
- 19 同書 2頁
- 20 同書 2頁以下

- 21 Vgl. P. Handke: Winterreise S.13
- 22 Vgl. Walter Benjamin: Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit In: Gesammelte Schriften Bd. I-2 Suhrkamp Zweite Auflage 1978 S.436f.
参照 ヴァルター・ベンヤミン／高木久雄・高原宏平訳：『複製技術の時代における芸術作品』ベンヤミン著作集2 晶文社 12頁 以下
- 23 ibid. S.436 同上書 13頁
- 24 ibid. S.438 同上書 14頁
- 25 ibid. S.439 同上書 14頁
- 26 ibid. S.439 同上書 15頁
- 27 ibid. S.439 同上書 15頁
- 28 Vgl. Peter Handke: Wunschloses Unglück 1972 Suhrkamp st.146 S.22f.
- 29 Vgl. Walter Benjamin: Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit In: Gesammelte Schriften Bd. I-2 S.506f
参照 ヴァルター・ベンヤミン：『複製技術の時代における芸術作品』ベンヤミン著作集. 244頁 以下
- 30 Vgl. Peter Handke: Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien Suhrkamp 1996 S.51
- 31 Vgl. Hermut Kreuzer: Biographie, Reportage, Sachbuch. Zu ihrer Geschichte seit den zwanziger Jahren. In: Probleme der Moderne. Studien zur deutschen Literatur von Nietzsche bis Brecht. Festschrift für Walter Sokel. Hg. von Bennjamin Bennett, Anton Kaes, William J. Lillyman. Max Niemeyer Verlag Tübingen. 1983 S.446f.
- 32 Peter Handke: Unter Tränen Fragend. S.110
ペーター・ハントケ『空爆下のユーゴスラビアで－涙の下から問いかける－』 123頁以下